



2016年1月8日発行

不妊治療について感じること

高度生殖医療技術研究所顧問/群馬パース大学教授

さくらレディースクリニック 不妊学級担当

荒木康久

私は、昨年より臨床検査技師を目指して勉強している大学生を対象に“生殖医療技術学”なる講義を担当しています。初めて講義を受ける2年生に「不妊」「卵子の老化」「赤ちゃんが自然妊娠できるのは大体何歳まで？」等々アンケートを取ってみましたが、正しいと思われる回答は30%程度の学生だけでした。「卵子の老化」に至っては、その言葉さえ聞いたこともないと答える学生がほとんどでした。ところが、その次の年に入学してきた1年年生に同様なアンケートを実施したところ、ほとんどの学生が「卵子の老化」という言葉は聞いたことがある、と答えたことには驚かされました。なぜ、1年間でこんなにも変化したのでしょうか？不妊症に関するニュースを見聞する機会も確かに増えました。マスコミの影響も大いにあるのでしょうか。臨床検査技師の卒業生から生殖医療の分野を目指す学生も増えてきていることも事実です。

誰も不妊治療の根本的解決策は早いうちに妊娠・出産することだと理解しています。しかし、それが分かっているでもできない社会構造（女性の社会進出に伴う晩婚化、男女問わない不安定な雇用問題、など）の他、人生の多様性から結婚感の変化等々が原因と考えられます。

私は群馬県前橋市に在住しています。市長さんをお願いしてボランティアで中学や高校養護教諭（群馬県前橋市）の方々に「卵子の老化」について、不妊予防の観点から講義をさせていただきました。その際、先生方はその必要性を感じて「もっと、正しい女性の生理学を学んでもらいたいし、学ばせたい」と口をそろえて仰っていました。しかし、このような考えは日本の社会全体から見るとまだまだ一般化されていない考え方であると感じます。

少なくとも私の関係している大学の学生は、アンケートで見る限り1年間で不妊症に対する意識は変わっているように見えますが、果たして彼ら彼女らが卒業後、自分の身体状況を把握しながら人生設計を立てられるかどうかは疑問です。なぜなら、上述したごとく現在の日本の社会において、子育てをしながら安定した生活を歩むためには困難が山積しているからです。

年齢が重ねれば重ねるほど、どんな高額先端医療を施しても解決できないことが起こります。若いうちに身体の不調を感じたら、どんなに軽症だとしても、産婦人科や特に生殖医療を専門とするクリニックを気軽に訪れる感覚を持っていただけたらと思っています。また、男性も不妊症に関して女性以上に知識を持つことが重要です。このような姿勢が不妊治療を身近なものに近づける一つであるように思います。

食生活を見直したり、日々の適度な運動を実施したり、規則正しい生活を見直すことが、不妊予防につながると考えています。現在、不妊治療中の方にとっては、診察をシッカリ受けて医師と相談しながらご自分に適した治療方針を立てていくことが重要だと思います。朝起きてまず鏡を見て、自分自身に笑い顔で挨拶することがストレス解消であり不妊予防につながると聞いたことがあります。ストレス解消に努めましょう。

